

第三回「9条アジア宗教者会議」開催される。

第三回「9条アジア宗教者会議」が10月4日の現場研修のあと、翌5日から7日までの三日間、沖縄県中頭郡西原町の沖縄キリスト教学院を主会場に開かれた。同実行委員会が主催、公益財団法人庭野平和財団（庭野欽司郎理事長）が協賛。2007年の東京、2009年の韓国ソウルにつづいて二年ぶりの開催。

参加者は、韓国、タイ、香港、台湾、パキスタン、南アフリカ、フィリピン、スイス、イタリア、カナダ、アメリカ、日本などからキリスト教、イスラーム教、仏教などの宗教者220人。開催地の沖縄からは多数のオブザーバーが参加した。

今回、開催地として沖縄が選ばれたのは、同実行委員会によれば、<過去二回の会議の結果、米国の存在がアジアにおける9条実現の大きな障害となっていることから、非暴力によって平和を作り出さなければならないという共通認識を得た>からだという。一のことから<沖縄には「非武」の伝統が元来あり、沖縄は明治政府によって侵略併合され強制的に日本的一部にされ、15年戦争の際は日本の國体護持のために捨石とされ、日本国独立の引き換えに米国の支配下に置かれ、米軍基地が存置され、「本土復帰」後も状況は変わりません>ということから、沖縄が開催地としてふさわしいとされた。

そして、「9条を沖縄で実現し、9条を各国に紹介し、9条を国連憲章に書き込むこと」と「9条をすべての人の心に刻むこと」をめざし、二日目の午後からのグループ討議、三日目の全体会議などを経て、最終日の7日に「声明」（別項1）と韓国の参加者から提案された「済州島江汀村に平和を！」を全体会議で採択して特別声明（別項2）とした。

会議前日（10月4日）に行われた現場研修は、約60人が参加。降りしきる雨の中、午前9時ごろから那覇市内の陸上自衛隊那覇駐屯地内の高江洲朝男さんの土地を訪問。高江洲さんは、同基地に先祖代々の土地100坪（約333m²）を持ち、政府に対して土地賃貸契約の解除と土地の返還を要求。2000年4月7日、民法に基づく契約が解除されて土地が返還された。だが、この土地には水がなく、水道を引くことを自衛隊が許可せず、高江洲さんは基地外から水を運び、ここを「ちゅらさガーデン」（美しい庭園）と名づけて市民に開放したい。といい、花や木を植えている。沖縄の伝統舞踏で一行を歓迎した高江洲さんは、庭の一隅に平和を祈念する黒木（沖縄の伝統的楽器の三線の材料）を参加者と共に植えた。成長した黒木で作った三線で、音楽を通して平和を訴えていたい、と願っている。

このあと南部の摩文仁の丘を訪問。沖縄平和記念資料館、ひめゆり資料館などを参観。王城糸数にある沖縄戦跡「アブチラガマ」（全長270m）の自然洞窟の壕を見学して、沖縄戦の激戦の跡をしのんだ。

会議は5日朝の現場研修から始まった。午前8時半、普天間基地が一望できる嘉数高台で関係者から基地についての説明を受けた。その後、名護市辺野古の米軍基地建設反対運動の現場を訪問し、関係者から基地建設反対運動について説明を受けた。

午後1時半から主会場の沖縄キリスト教学院シャロームセンターに移動し、開会式を行なった。沖縄キリスト教学院大学の、神山学長の歓迎のあいさつとオリエンテーションのあと午後2時から基調講演。帽子を被った大学教授として知られる高良鉄美・琉球大学法科大学院教授が「憲法9条と沖縄の現実」と題して講演。沖縄の地勢的位置の特徴から説き起こして、沖縄が軍事的にしか利用されていないことを指摘し、グローバル化に資することを提案。明治憲法と戦争、沖縄分離と対日平和条約、安保条約との関係などを解説。憲法9条と沖縄の現実について述べた後、「憲法9条の目的は、平和に生きることを保障し、『人間の尊厳』を守ることである。」とした。

そして「恐怖」は戦争が最たるものであるが、暴力や差別、圧迫、ストレス、健康不安、生活不安なども含む概念である。「欠乏」は単に戦争による飢餓だけを表すのではなく、食料や良好な環境、人間関係、思いやり、愛情、配慮、理解、信頼、人間性等に欠ける状態をも意味している。これらは現在の人々が最も感じる恐れであり、最も欠けているものを指していると言える。憲法9条の広がりをあらためて見つめる必要があろうーと結論づけた。

休憩のあと発題。韓国の平和のため市民ネットワークのチョン・ウクシク氏が「平和憲法の観点から見た米国の軍事戦略と韓半島」を発表。沖縄の基地・軍隊を許さない行動する女たちの会の高里鈴代さんが「沖縄からの発題」として講演した。

ついで、ストーリーシェアリング1として、韓国・チェジュ大学のチョウヨンベ教授が「チェジュ（済州島）海軍基地の問題点と実際」を報告、ごく最近、反対抗議行動を行った韓国の現職の司祭が数人も逮捕されるなどの現状が報告された。この報告は参加者一同に支持され、特別決議となった。

ついで日本基督教団牧師で、慶良間諸島の渡嘉敷村で「集団死」から生き残った金城重明さんが「『強制集団死』から生かされて」と題して体験と経験を述べ、生かされていることの感謝を語って参加者に感銘を与えた。

午後6時すぎからは、別会館でレセプション。

二日目の6日は午前8時から朝祷。韓国からの参加者十数人が前に出て祈りを行った。

午前9時すぎから発題2。米国のパックス・クリスティのニック・マーレさんが「アメリカ人から見た米軍基地」、日本山妙法寺の武田隆雄さんが「1985年より沖縄平和祈念行脚を歩いて」と題して発題した。

質疑応答の後、ストーリーシェアリング2。パキスタンから来たイスラーム教のシュナイド・アフマドさんが「宗教間の連帯運動についての考察」を述べ、預言者ヨセフのたとえ話を引いて、「裁きの日」の証しとなる生き方をすべきだと強調した。

ついでタイから来た仏教のスラッセ・コソルナヴィンさんが「タイにおける平和運動と9条」と題して発題。世界の幸福度をはかる尺度（GNH（国民総幸福度））について述べ、富が一部に集中する経済ではなく、仏教精神による経済、自然災害が多発している現状から助け合いの精神で危機を乗り越えるための協力と非暴力の生き方について述べ、9条を

モデルとして平和に貢献しようと結んだ。

つぎに「真宗大谷派・9条の会」代表世話人の児玉曉洋（真宗大谷派教学研究所元所長）さんなど四人の参加者からのコメントがあった。昼食のあとグループ討議。午後2時から午後4時までの約二時間、英語、韓国語、日本語の五グループに分かれて、宣言文の内容について熱心に討議。午後4時から午後5時までは全体会議で各グループの討議内容を発表した。

最終日の7日は、午前9時から10時半まで「声明」の討議、休憩をはさんで「声明」の最終確認を行って午後1時に閉会。

午後からは県庁を訪問し仲井真県知事あてに「声明」を提出したあと、戦後いち早く復興して「奇蹟の一マイル」といわれた国際通りを平和行進して牧志公園にて記念撮影後、解散した。

なお、10月8日午後2時から午後4時半まで、東京・矢来町の牛込聖公会聖バルナバ教会礼拝堂で「報告会」が行われた。